

言語少数派の子どもに対する 父母と協働の持続型ケアモデルに基づく支援授業の可能性 —言語生態学の視点から—

小田 珠生

学位取得年月：平成 22 年 3 月

取得学位名：人文科学博士

学位授与機関名：お茶の水女子大学

【キーワード】言語少数派の子ども、言語生態学、父母と協働の持続型ケアモデル、日本人支援者
【要旨】

本研究では、教科・母語・日本語の相互育成が「父母と協働の持続型ケアモデル」の中核となり得るかを探った。「父母と協働の持続型ケアモデル」は、言語少数派の子どもに対するケアモデルであり、来日前に子どもの「外的生態環境」のネットワークの要であったと考えられる父母が、来日後も日本人支援者との協働の下で継続的に子どもの教育に関わることで、子どもの「内的生態環境」における言語・認知・情意のネットワークの継続的な育成を目指すものである。

まず研究 1 では、教科・母語・日本語相互育成学習を行った本支援授業に対する「当事者の評価」を探るために、支援者として参加した子どもの母親に対してインタビュー調査を行い、分析した。具体的には、母親が本支援授業に対してどのようなイメージを持っていたかを PAC 分析の手法を用いて探った。分析の結果、母親は本支援授業に対し、「母語使用によって自らの《教育参加の実現》がなされた場であり、また、《日本人支援者の強い意志》が子どもの学習の継続や成績に良い影響を与えたと実感できる場」というイメージを持っていることが分かった。つまり、母親が本支援授業を、日本人支援者との協働の下で自身が外的生態環境の要として機能した場と意義づけていたことが明らかにされたと言える。

そこで研究 2 と 3 では学習場面でのやりとりを分析対象とし、研究 1 の結果を踏まえて、母親が支援授業に対して上記のようなイメージを持った根拠を探った。

研究 2 では、まず母親の《教育参加の実現》がどのようになされたかを探るために、どのように母親の教育参加の領域が拡張していったかを質的に探った。その結果、支援者として〈語彙〉の学習と〈母語による要約作文〉の活動に母語で参加したことが、さらなる「家庭での子どもの母語教育の開始」につながり、そして母語だけではなく、母語とつながる形での「子どもの日本語教育への参加」に発展し、そして、言語の学習だけではなく「子どもの進路のアドバイスへの参加」が見られたというように、時間の経過とともに母親が自らの教育参加の領域を自律的に広げていったことが明らかになった（外的生態環境の自律的拡張）。また、それとともに、子どもの母語話者としてのアイデンティティの保全がみられた（内的生態環境の保全）。

次に研究 3 では、《日本人支援者の強い意志》がどのようなものであったかを探るべく、日本人支援者がどのように親子のやりとりを支えていたかを質的に探った。その結果、日本人支援者は主導権を母親に譲り、「親子の母語による学習に関するやりとりを支える」とともに、親子の「民族言語的活力ピラミッドに基づく働きかけを受け止める」ことにより、三者間で母語尊重の姿勢が共有される環境をつくる役割を担っていた。すなわち、日本人支援者が、母親が主導権をとりやすいように意識的に母語・母文化を活かせる外的生態環境を整えていたことが、研究 1 で明らかになった母親の《日本人支援者の強い意志》というイメージにつながったと考えられる。

以上より、本支援授業への参加によって「母親と日本人支援者との協働による教育参加」と「外的生態環境のネットワークの自律的拡張」が可能になったという点で子どもの「外的生態環境」の改善が実現されたことが示された。また、その下で、日本語優先社会での子どもの母語話者としてのアイデンティティの保全ができたという点で子どもの「内的生態環境」の特に情意面の保全も実現されたことが明らかになった。即ち、教科・母語・日本語相互育成学習が、「父母と協働の持続型ケアモデル」の中核となる可能性が示唆されたと言える。

(おだ たまき)